

近代文学の青春期

——「浮雲」から「舞姫」へ——

渡 辺 忠 憲

一、近代と青春

明治時代は、近代日本文学の青春期にあたる。この時代の作家は、時代とどのような関係を保ちながら生きたのであろうか。これをみてゆくことよって、近代文学がいかに形成されていったかがわかると思う。

近代文学がしんに近代としての意義をもつようになったのは、江戸時代の戯作文学や自由民権運動の道具としての政治小説より脱して、文学の独自性が認められ、近代的文学観がうちたてられたときからである。

自我にめざめた文学作品の主人公は、多く「青年」であり、又作者も青年であった。自我の伸張は、現実の障害にはばまれて容易ではなかったが、これが人間に対する場合には恋愛となつてあらわれるのが主であった。ここに青春小説とよばれるものの誕生をみる。

そして、彼等の自我形成の過程は、近代文学形成の過程と一致したのである。作家の青春期は、近代文学の青春期でもあった。

二、近代文学のめざめ

いろいろな説があるが、明治二十年前後として、ほとんどまちがいはなからう。その確立は、小説に限つてみる場合とのあたりとするのが妥当であらうか。

二葉亭四迷「浮雲」は、従来文学史上に大きな位置をしめてきた。今までの研究家は、言文一致の先駆として、又、リアルに描かれた近代的自我の発現をもって、「浮雲」を高く評価するあまり、その欠陥を忘れてはいなかったであらうか。

まず、文体の不統一がある。これはそれほど重要でないとしても、未完という事実は見

逃しがたい。私は「浮雲」からは、大きな感動を得ることができない。それは小説形態が未熟であり、フィクションとしての豊かな成立がなされていないからではないかと思う。登場人物および時代に対して、すべて批判の目が向けられて、苦悩する内海文三の姿は描かれていても、そこで文三は観念の遊びをしているのではないかとさえ思える。三篇終末のお勢が出かけたあとの文三の疑心・樂觀・悲観・憤怒などのあわただしい感情の交錯は、その一例であらう。

近代文学の重要な要素としての心理描写は一応ここで確立され、二葉亭は自己を主体的に把握することはできたが、現実対象の外に立つて、自己の姿をみつめることはできなかったのではないか。あるいは、あまりにも懐疑心の深かったため、動きが取れなくなったのだからか。いずれにしても、これは二葉亭の人間としての弱さであった。そして、「浮雲」は未完のまま抛擲された。

ここで、私は、佐藤春夫とは別の立場から森鷗外の「舞姫」を近代文学のめざめの時期における一応の確立点としてみていきたい。

三、文学的世界の確立

「浮雲」には、近代日本の未熟性と、青年二葉亭の苦悩があらわれていた。

「舞姫」はどうであったか。

「五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはな」かったが、「げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず……浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり。」というのである。ここには対象を離れて、客観的に描こうとする鷹外の姿勢がみられる。すなわち、太田の自我の挫折を認めているのである。そして、太田の心におおいかぶさっているものは、ドイツで一度は芽ばえたが、完全に展開されなかった青春の自我に対する限りない惜別の情であり、又、自分を器械にするために待ち受けている、まだ十分に近代化していない故園への深い憂いであった。

「舞姫」は「浮雲」が中絶した翌年、紅葉・露伴の全盛期に出て、「浮雲」と連続的対応関係にあったとみられる。それは、内海文三と太田豊太郎に類似した条件があるのをみ

ればわかる。父親を早く失い、いつも一級の首で卒業し、一人子であり、官庁に出仕し、共に免官される。又、内海の場合は「便のなしい一人の母親の心を安め」であり、太田の場合「我家を興さむ」であった。我身のことよりも、こうした荷物を負わされていた。

ところが、両作品は作風を異にすると共に自我の性質もちがっている。「浮雲」では、既に自我にめざめていて、潔癖な行動を取ったために免官される。自我はめざめているのであるが、観念的な心理の葛藤に終始して、自我の展開は中絶される。これは、先にも言ったように、二葉亭が未経験の世界を描こうとして動きがとれなくなったのである。彼は「虚構」に弱い点があった。

一方、「舞姫」における自我のめざめは、「ただ所動的、器械的の人間になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなし憂ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。」なのである。その頃、エリスと知り合った太田は、その弱き心ゆえにつき合ひの悪かった同郷の友によって官長に報告され、免

官となる。「我一身の大事は前に横りて、洵に危急存亡の秋なのに……余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我致奇を憐み、又別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬚の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は」免官されて当惑しきっている太田を「余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしを奈何せむ。」という「離れ難き中」にさせてしまう。

めざめ始めた自我は、ここにおいて早くも挫折をみる。「浮雲」の場合は、挫折しようとする自我の戦いは、作者まで挫折させてしまった。「舞姫」の場合は挫折というより「屈折」と言った方が適當であろう。自我の上にかぶさってくる圧力を認めたくせいで、自我を曲りなりにも生き続けさせようとしたのである。たまたま、相沢の助けによって、太田は新聞社の通信員となる。「貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛」とのちに太田は言うが、エリスとの生活の間中、頭を去らなかつたのは「我学問は荒ることを恐れ、出世への望みは決して捨ててはいなかつたのである。

「弱き心を断て」と相沢に言われ、「わが弱き心には、思ひ定めんよしなかりしが、姉く友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。」に至る。これは一度めざめた自我の明らかな挫折であった。

「嗚呼、独逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の誓し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。霧にこれを繰つりしは、我某省の官長にして、今はこの糸あなあはれ、天方伯の手中に在り。」

ここに日本の官僚機構のあらわれがある。太田は自分の自我がもろくも挫折するのを認めた。しかし、内海文三のように自己を見失ふことはなかった。天方伯に「われと共に、東に帰る心なきか」と問われて、「若しこの手にしも縋らずば、本国をも失ひ、名譽を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を働いて起り、「承はり侍り」と応える。

いかにも現実的ではないか。「妥協」などということばがあたりかまぬ知れないが、これは自分を生かすための手段であった。エリスの癡狂は、帰国の運命にある太田には好都合

であった。

「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憶むこゝろ今日まで残りけり。」

すなわち自分自身をも憎んでいるのである。相沢は時代にたくましく生きる典型であった。それは太田の中にも生きていた。相沢は偶然にも太田の言うべきことを代弁したにすぎない。エリスの愛を捨てて帰ることに変わりなかった。国籍と名譽を捨てて、歐洲の孤児となるのも苦しいが、エリスを捨て、すなわち自我の挫折を認めて、重苦しい故國に帰って行くのは、考え方によっては、もっと苦しいことであったかも知れない。「浮雲」と比較すると、これは挫折はしたものの、その後の現実的積極的な生き方を描いて注目されるものがある。ここに、近代文学形而上での隙しい道が示されている。

鷗外は、太田の中にある二つの姿——近代自我と相沢的立身——を描いてある種の完成を与えた。これが「舞姫」冒頭の苦惱する太田の姿であった。このようにして「浮雲」と同じような自我のめざめと挫折を描いていく過程に、鷗外のもつ小説としての手法——虚構の世界——が確立されたのである。

一方、鷗外は「櫛草子」(創刊号・明22・

10)に、「西学の東漸するや、初その物を伝えてその心を伝へず。学は則格物窮理、術は則方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知りて、その徳義の民たるを知らず、況んやその風雅の民たるをや。」と言っている。

これは「洋行婦りの保守主義者」としての彼の姿でもあった。彼の精神の根底にある西洋文化と日本文化との抗争がかかわってくる。

その意味においては、彼の目ざしたのは、古典的な美の世界であったかも知れない。そのような鷗外の姿を、自我の展開の道を圧迫するものだとする説にたとえ従ったとしても、革新的な「浮雲」がなしえなかった「虚構」としての文学の世界の確立を「舞姫」がなしたのとは皮肉な事実であった。

その「虚構の世界」の根底にあるものはどのようなものであったかを、文体と共に研究するのが、今後の私の課題であらう。